

修士論文（要旨）

2020年1月

精神障害者が職業準備性を獲得していく心理的体験プロセスの質的研究

指導 池田 美樹 先生

心理学研究科
臨床心理学専攻

218J4004

栗田 眞紀

Master's Thesis(Abstract)
January 2020

A Qualitative Study of Psychological Processes in the Development of Job Readiness
by People with Psychiatric Disabilities

Maki Kurita
218J4004

Master's Program in Clinical Psychology
Graduate School of Psychology
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Miki Ikeda

目次

第1章 問題	1
1-1. 精神障害者のリハビリテーションとリカバリー	1
1-2. 精神障害者のリハビリテーション準備性	1
1-3. 精神障害者のリハビリテーションとケア	2
1-4. 精神障害者をめぐる就労状況	3
1-5. 精神障害者における職業準備性	4
1-6. 精神障害者の職業リハビリテーションと自立訓練（生活訓練）	5
第2章 目的と研究意義	8
2-1. 目的	8
2-2. 研究意義	8
第3章 方法	9
3-1. 期間	9
3-2. 対象	9
3-3. 手続き	9
3-4. 調査内容	10
3-5. 倫理的配慮	10
3-6. 分析方法	11
第4章 結果	12
4-1. 分析結果	12
4-2. カテゴリーの説明	12
4-3. 結果図とストーリーライン	16
4-3-1. 結果図	16
4-3-2. ストーリーライン	18
第5章 考察	19
5-1. 各時期における概念とカテゴリーの考察	19
5-2. 各時期における課題と支援	26
5-3. 全体の考察とまとめ	30
5-3-1. 職業リハビリテーションの観点からみた本研究の結果	30
5-3-2. 精神障害者の特徴と求められる支援	32
5-4. 本研究の限界と今後の課題	33

謝辞

引用文献

資料

第1章 問題

精神障害者においては、発症により社会的な機能の低下が起こり、生きていく中でさまざまな困難を経験する。特に深刻なものの一つが就労に関連する困難である。

1990年代に入り、受援者と支援者それぞれの立場から、精神障害からのリカバリーとは何か議論されるようになった。精神障害者のリカバリーを定義しようという動きは、精神科リハビリテーションの理念の再検討の動きでもあった。「人々が生活や仕事、学ぶこと、そして地域社会に参加できるようになる過程」(President's New Freedom Commission on Mental Health, 2003 山口・松長・堀尾訳 2016)であるリカバリーにおいては、仕事は目標と原動力の両方になるものと一般的に考えられている(Sullivan, 1994)ものの、実現は容易ではない。精神障害者の職場定着率は、障害者求人・一般求人(開示)・一般求人(非開示)のすべてにおいて、他の障害種別に比べて低い傾向にある(厚生労働省, 2017)。

本研究では、「職業準備性」(日本職業リハビリテーション学会, 2002)の向上には「リハビリテーション準備性」(Anthony, Cohen, Farkas, & Gagne, 2002 野中・大橋訳 2012)の向上が必要であると考え、この2つの観点から精神障害者が就労に至る過程について検討する。特に、生活能力の向上を目的とした訓練としている生活訓練に着目し、生活訓練においてどのような体験を経て就労への挑戦に至るのか、そのプロセスを明らかにする。

第2章 目的

本研究では、精神疾患を発症し、その後就職を目指している精神障害者が職業準備性を獲得していく心理的体験プロセスの抽出を目的とする。

第3章 方法

インタビューは1名につき約70分から80分の半構造化面接を実施した。導入として、時間軸を横軸、職業準備性の獲得度を縦軸とし、職業準備性の変化を直線または曲線で表すグラフであるライフラインシートと、「就労移行支援のためのチェックリスト」(障害者職業総合センター, 2006)への記入を求めた。得られた録音データは逐語録化し、木下(2007)による修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)による分析を行った。分析テーマは「精神障害を抱えた当事者が、自立生活訓練事業所への通所を経て職業準備性を獲得していくプロセス」、分析焦点者は「就労を目的として自立生活訓練事業所を利用した経験がある、精神障害をもつ当事者」とした。その結果、分析対象者は10名となった。

第4章 結果

M-GTAによる分析の結果、28個の概念を9カテゴリーに分類し、特に重要と考えられるコアカテゴリーを2個生成した。カテゴリー間の関係を検討し作成したストーリーラインは次の通りである。コアカテゴリーは【】、カテゴリーは《》、概念は〈〉を用いて示す。

就労を目指す精神障害者は、差別などのネガティブ体験や社会的役割や居場所の喪失などから心理的な落ち込みを経験する。経験は繰り返され、《精神疾患をめぐるネガティブ体験の累積》が起こる。精神障害者は現状打開を求めるものの、〈支援機関や受援方法の不明さ〉に思い悩む。そこへ〈他者からの生活訓練の紹介〉を受け、開始のタイミングの見極めを経て訓練を開始する《変化への希求から訓練開始へ》という動きが起こる。

訓練開始後、スタッフや生活訓練利用者に対する〈安心感の獲得〉を経て《関係性の構築》が促進され、さらに悩みを話し合うことができ、自己管理を支えてくれる生活訓練という《心理的な支えとなる場の獲得》がもたらされる。《関係性の構築》と《心理的な支えとなる場の獲得》は、【訓練を維持する基盤の構築】を構成する。一方で、《関係性の構築》は〈健常者イメージのポジティブな変容〉や〈生活訓練利用者集団のポジティブな内在化〉、さらに《障害イメージの変容》をもたらし、【訓練を維持する基盤の構築】を支える。

訓練継続において、精神障害者はストレス発散や自身のペース把握などの気づきを得る。また、他者から頼られる体験などから自己効力感を実感し、自主性や協調性などの集団スキルを獲得する。《体験して得る気づきと獲得》は訓練継続を後押しする。また、他者の指摘を受け入れやすくなり、現状や発症時期に関する《自己理解への深まり》が促進される。

訓練継続における《体験して得る気づきと獲得》と《自己理解の深まり》は〈新たな習慣やスキル、目標やモデルの獲得といった《訓練継続による成果》の獲得をもたらす。成果が実感されると【継続により実感される生活訓練の意義】の理解が促進される。

成果の実感を経て自立生活を営む自信を得ると、精神障害者はスタッフの提案を契機として具体的な職場を就労先として定める。そしてさらに必要なスキルの獲得など《スタッフによる橋渡し》を得て、就労への挑戦に至る。

第5章 考察

第1章2節で言及した「リハビリテーション準備性」(Anthony, Cohen, Farkas, & Gagne, 2002 野中・大橋訳 2012)における5つの側面と本研究の概念やカテゴリー間において、訓練開始前には対応がほとんどみられなかったものの、訓練終了時はすべての項目において対応がみられ、かつポジティブな変化を経験していた。このことから、生活訓練によって分析対象者のリハビリテーション準備性が向上していることが窺える。特に、「対人的親密さ」の向上が《障害イメージのポジティブな変容》をもたらし、職業準備性の獲得を促進していると考えられることから、他者との協力関係の構築に前向きな気持ちが持てるか否かが、精神障害者の職業リハビリテーションのターニングポイントになると考えられる。

また、支援の際には、対象者の特徴を踏まえた支援が求められる。本研究の分析対象者においては、感情表出がされにくいこと、発症以後に関する記憶が曖昧になる傾向があることといった特徴がみられた。支援として、フィードバックする際は現在に焦点を当てて伝えることや、困難への対処法を伝え、習慣化を支えることが考えられる。

本研究では、職業準備性を分析テーマとして設定したが、生活訓練を対象としたため、職業準備性や職業リハビリテーションを包括的に検討できなかった。今後の課題として、対象者の選定があげられる。職業リハビリテーションに相当する生活訓練の利用者、あるいはリハビリテーションを経て就労に至った者に対象者を統一し、職業準備性の基礎的な部分を検討するのか、包括的に検討するのかを明確にする必要がある。また、本研究の分析テーマについて、生活訓練で体験される心理的プロセスが、必ずしも職業準備性と合致するわけではないことがあげられる。すなわち、生活訓練は、次の職業リハビリテーションに移行するための前段階であるため、生活訓練の中で変容することが期待されている要因、就労に対する自己効力感などを分析テーマに設定して調査することがあげられる。

引用文献

- Anthony, W., Cohen, M., Farkas, M. & Gagne, C. (2002). *Psychiatric Rehabilitation (2nd ed.)*. Center for Psychiatric Rehabilitation, Trustees of Boston University.
- (アンソニー, W., コーエン, M., ファルカス, M., ガニエ, C. 野中猛・大橋秀行 (監訳) (2012). 精神科リハビリテーション 第2版 三輪書店)
- Cohen, M.R, Anthony, W.A., & Farkas, M.D. (1997). Assessing and developing readiness for psychiatric rehabilitation. *Psychiatric Services, 48*(5), 644-646.
- Deegan, P. (2001). Recovery as a Self-Directed Process of Healing and Transformation. In Brown, C. (Ed.), *Recovery and Wellness: Models of Hope and Empowerment for People with Mental Illness* (pp.5-22). New York: The Haworth Press.
- (ディーガン, P. (2012). 自分で決める回復と変化の過程としてのリカバリー
ブラウン, C. (編) 坂本明子(監訳). リカバリー 希望をもたらすエンパワーメントモデル 金剛出版)
- 独立行政法人 高齢・求職者雇用支援機構 障害者職業総合センター (2009). 就労支援のためのチェックリスト活用の手引き Retrieved from <http://www.nivr.jeed.or.jp/download/kyouzai/kyouzai19-05.pdf> (2019年10月22日)
- 独立行政法人 高齢・障害・求職者雇用支援機構 (2019). 平成30年度版就業支援ハンドブック Retrieved from <https://www.jeed.or.jp/disability/data/handbook/om5ru8000000azsi-att/q2k4vk000001px36.pdf> (2019年10月22日)
- 木下康仁 (2007). ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて 弘文堂
- 厚生労働省 (2017). 障害者雇用の現状等 Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11601000-Shokugyouanteikyoku-Soumuka/0000178930.pdf> (2019年6月1日)
- 中井久夫・山口直彦 (2004). 看護のための精神医学 第2版 医学書院
- 中戸川早苗・眞嶋朋子・岩崎弥生 (2016). 統合失調症をもつ人の就労と生活との調和の構築過程 千葉看護学会会誌, *22*(1), 1-11.
- 日本職業リハビリテーション学会職リハ用語検討研究委員会(編) (2002). 職業リハビリテーション用語集 第2版 日本職業リハビリテーション学会
- 大阪府福祉部 障がい者自立センター 自立支援課 (2018). 大阪府立障がい者自立センター退所者アンケート調査結果 Retrieved from http://www.pref.osaka.lg.jp/attach/122/00165830/h28-29_questionnaire%20results.pdf (2020年1月25日)
- President's New Freedom Commission on Mental Health (2003). Achieving the promise: transforming mental health care in America: executive summary of final report (Rep. No. DMS-03-3831). Department of Health and Human Services, Rockville.
- Rapp, C.A., Goscha, R.J. (2012). *The Strength Model: A Recovery-Oriented*

- Approach to Mental Health Services Third Edition*. Oxford University Press.
(ラップ, C.A., ゴスチャ, R.J. 田中英樹 (監訳) (2014). ストレングスモデル リカバリー志向の精神保健福祉サービス 金剛出版)
- 障害者の職業準備に関する調査研究委員会(編) (1987). 精神薄弱者の職業準備に関する調査研究 労働省・身体障害者雇用促進協会
- Sullivan, W.P. (1994). A Long and Winding Road: The Process of Recovery from Severe Mental Illness. *Innovations & Research*, 3(3), 19-27.
- 東畑開人 (2019). 居るのはつらいよ ケアとセラピーについての覚書 医学書院
- 東京都福祉保健局 (2018). 障害者の生活実態 Retrieved from https://www.fukushihoken.metro.tokyo.lg.jp/kiban/chosa_tokei/zenbun/heisei30/30houkokusyozenbun.files/07_2-4_kekka-gaiyo_165-229P.pdf (2020年1月25日)
- 山口創生・松長麻美・堀尾奈都記 (2016). 精神疾患におけるパーソナル・リカバリーに関連する長期アウトカムとは何か? 精神保健研究, 62, 15-20.
- 財団法人 日本障害者リハビリテーション協会 (2011). 厚生労働省 平成 22 年度 障害者総合福祉推進事業 知的障害者・精神障害者等の地域生活を目指した日常生活のスキルアップのための支援の標準化に関する調査と支援モデル事例集作成事業 Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/bunya/shougaihoken/cyousajigyoudl/seikabutsu14-1.pdf> (2019年12月31日)